東京大学大学院　工学系研究科　都市工学専攻
社会人のための修士課程｜都市持続再生学コース
Master's Program in Sustainable Urban Regeneration
東大まちづくり大学院
mps news No.17
2022.3.18

開講式：第15期生18名が入学

一部オンラインで行われた開講式の様子

2021年10月1日、記念すべき第15期生のための開講式およびガイダンスが対面及びオンラインのハイブリッド形式で執り行われました。今年は入試に合格した18名の新入生がまち大に加わりました。都市工学専攻、社会基盤専攻、建築学専攻、およびまちづくり大学院を代表する教員からの祝辞をご紹介します。

お祝いのことば

ご入学おめでとうございます。

まちづくり大学院は、高度な知識を専門的に身に着けていただくという意味で、国内に類例のないプログラムです。コロナ禍において、これまで大学院の教育研究は大きな制約を受けていました。まだまだ感染は不確実な状況ですが、非常事態宣言の解除を受け、大学の活動制限のレベルが緩和されました。オンラインの講義も多くありますが、各教員の工夫によりいろいろな対面の機会も少しずつに増えてきました。

みなさんへのお願いとして、みなさん自身が社会人の大学院生として模範的な感染防止の教育研究を学部生、大学院生に見せていただき、規範となっていただきたいと考えております。教育研究の要望がある場合は是非ご提案ください。できる限りみなさんの要望に応え、みなさんの目線にあった教育づくりをしていきたいと思います。

まちづくりは、コロナ禍で都市が大きな影響を受け、転換期を迎えています。大学でも毎日のようにポストコロナのニューノーマル、脱炭素社会、気候変動の中で都市はどのように変わっていくのかが、盛んに議論されています。中でも注目すべきは、これからの時代は、これまでの時代とは違う新しい戦略や規範が必要になる、というテーマです。新しい時代は、いわゆる規範的ノーマティブ（normative）なアプローチではなく、探索的エクスプロラティブ（explorative）なアプローチが必要ではないか、ということです。探索的なアプローチというのは、これしか方法がないというものではなく、アダプティブ、すなわち選択的に物事を進めていくものです。探索的なアプローチのためには多様性が必要だと言われますが、まちづくり大学院は、学生それぞれが経験豊かで、多様な知識を持っていることが特徴です。みなさんが同級生として学び合う中で、自身の経験、知識を共有し、またそれを教員も共有することで、コロナ禍の時代で新しい規範、新しい戦略を構築するためのスタイルをまちづくり大学院からこの時代に発信して行けるのではないでしょうか。教員一同とても楽しみにしています。

多くの人々が賛同できる新しい戦略、規範を作るには、社会に実装していくための経験と知恵が必要です。これまでの経験と知恵に加えて、理論、方法論、実践のアプローチをまちづくり大学院での2年間で、一生の財産として身に着けていただければ幸いです。

都市工学専攻 藤田 壮 教授（専攻長）

社会基盤学専攻
田島 芳満 教授
（専攻長）

この度はまちづくり大学院へのご入学おめでとうございます。
With、ポストコロナへの対応はもちろんですが、気候変動に伴って激甚化する気象災害や巨大地震、津波に対する防災、減災対策など、まちに期待される機能や役割はさらに多様化して、重要になってきていると考えております。私自身の専門は海岸工学で、普段はまちには背を向けて海を見ている形ですが、それでも昨今の津波や高潮による沿岸部での大規模災害を見ていると、海外の防災建造物とまちづくりと一体的な防災減災が必要不可欠で、まちづくりの大切さを強く感じています。

このような時代、社会情勢、自然環境とともに変化するさまざまな要請に答えるまちづくりを実践するには、要素の高い専門性の深化だけでなく、これら立脚した総合的、俯瞰的な視点とそれに基づく適切な判断が必要不可欠です。本プログラムでは文理融合の専門的かつ実践的な講義だけでなく、ケースメソッド、演習を通じてさまざまな専門を持つ社会人学生が交流し、議論する場が多く提供されています。まちづくり大学院の大きなメリットの1つは、このような専門の異なるみなさんの知が集結し、議論を戦わせることで、個々の視座を高め、広げ、自身の専門への気づきを得ることにあるのではないかと考えております。

みなさんには、ぜひ知識や技術を得るだけでなく、講義や演習などさまざまな場でご自身の知識や経験を出していただき、相互の学びの相乗効果を飛躍的に高めるとともに、それが結果として各専攻の教育、研究、他の学生への良い波及効果になることを願っています。

建築学専攻
佐久間 哲哉 教授
（専攻長）

ご入学おめでとうございます。

これまで本コースを修了した人の論文の中には、建築学の研究テーマが近い部分があると感じています。建築であれば建築の集合として都市を見ていくことになりますが、まちづくりの視点から建築の計画学あるいは、環境工学という分野で熱、空気音、光、人間の心理、環境行動を扱う分野もございます。本コースはすでに充実したカリキュラムが組まれているが、ぜひその枠をはみ出して社会基盤、建築の先生、研究室と交流を持っていただきたいと思います。というのも、大学の中は意外と各学科、専攻で隣の専攻の詳しいところまで各教員も把握していないこともあるからです。みなさんが大学を発掘いただき、自身の関心のあるテーマの話を聞いてみることで、大学の中をつなぐ役割として貢献いただけるとご自身に有意義になるとともに、大学としてもありがたいことだと考えております。

みなさん社会人で、モチベーションも高いと思いますが、大学は知識を一方的に受けるものではなく、議論を戦わせることで新しいものが見つかっていくものでもあります。答えが用意されているものではありません。ぜひみなさんの新しい発想が展開されることを楽しみにしています。

まちづくり大学院
小泉 秀樹 教授
（コース長）

都市持続再生学コースは昼の大学院生のコースと比べて、異なる点が３つあります。１つは、みなさん自身が社会人であり、まちづくりに一定の経験があるということです。みなさんは、それぞれに何らかの専門家であると思います。みなさん自身が相互に学び合うことができる関係は昼の学生にはなかなかありません。そういう社会的関係をうまく活用することで学習効果が非常に高くなると考えております。また、OB・OG を見ていると、在学中だけなく、修了後もさまざまな形で交流を続け、場合によっては一緒に仕事をしています。中には教員と一緒に仕事をしている方もいます。コース自体がさまざまな関係性の網の目が存在する貴重な場になっているので、新しい関係性を形作って、加えていっていただきたいと思います。

２点目は、三専攻が協力して行っているという点です。もともとは三専攻で取り組んだ都市持続再生学の創出という大きな研究プロジェクトがあり、その成果を教育に還元することを目的として創設されたのが本コースになります。都市工学の先生だけでなく、建築学、社会基盤額の三専攻の先生が協力して運営しています。もちろん講義を提供する先生もいますが、社会基盤額や建築学の先生に指導教員になってもらう、論文指導をしてもらうということもあります。都市工学の狭い中でのまちづくりではなく、建築や社会基盤にも開いた幅広い観点からのまちづくりを学んでいただきたいと考えています。また、教員とのネットワークも役に立つので、この特徴を利点として活用いただきたいと思います。

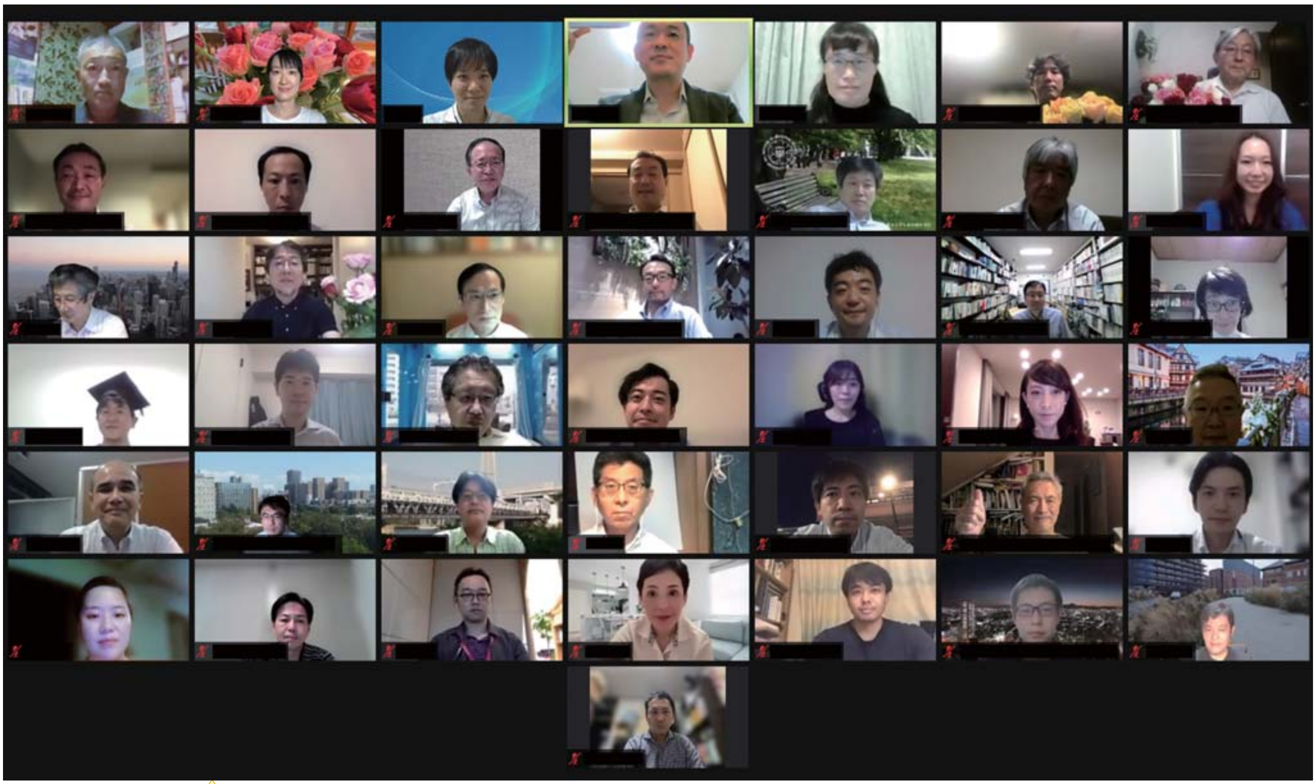
３点目は、企業のみなさんに協力をいただいた寄付講座によって、都市持続再生学コースの運営をサポートいただいているということです。協力いただいている企業は、非常に多くのまちづくり関係の企業になっています。寄付講座が設置されていることで、非常に多くの多彩な外部の先生に協力いただいて講義を行っています。その結果、まちづくり大学院のコースワーク（科目）は日本ではもちろん類を見ないものになっていますし、海外の社会人向けのコースと比較しても特異な、突出した講義になっていると考えています。様々な領域の専門家の先生や実務家の方がまちづくりに講義をするものは、他にはないものになっていると思います。ぜひ外部の先生、寄付講座の企業のみなさんとの交流を通じて、関心や研究テーマを掘り下げたり、社会的関係を広げていただきたいと思います。

コロナ禍の状況はまだまだ続きそうですが、講義はオンラインもしくはハイブリッドで行い、演習は現地で踏査するということを配慮していきたいと考えています。先に述べた３つの特徴を最大限活用いただき、まちづくりの知識を身に着けるだけでなく、研究を通じて、実際のまちづくり、政策、先の社会で役立つような新しい発見をしていただきたいと思います。また、さまざまな先生方、同級生、先輩方と良好な関係を構築いただきたいと考えています。良好な関係がなければまちづくりは実践できません。良好な人間関係づくりを一人一人が意識して社会性を持って、同僚、先輩、後輩と学んでいっていただきたいと思います。みなさん一人一人がまちづくり大学院の価値を高めるような志のすばらしい人材に育っていっていただければと思います。

2021年度秋季学位授与式・よいまち会
14年間で修了生が184名に

2021年9月24日、東京大学秋季学位授与式及び学位記伝達式が行われました。

新型コロナウィルス感染症の流行の影響で2021年度は代表者のみの出席でした。2021年9月修了は、9期生1名、10期生1名、11期生3名、12期生2名、13期生4名の計11名が修了しました。2021年3月修了の11期生1名を合わせると12名となり、これまでの修了者は計184名となりました。12名の修了生の論文題目は以下のとおりです。国内外における持続可能な都市地域づくり・まちづくりに関する、多種多様な修士論文が揃いました。学位授与式終了後は、13期生主催による謝恩会（よいまち会）がオンラインで開催されました。寄付企業の皆様にも多数ご参加頂き、交流を深めました。



謝恩会（よいまち会）での集い

まちづくり大学院生の修士論文

【2021年3月修了】

・横浜市金沢区における地域交通導入活動発生及び導入実現の要因に関する研究
　—地形を考慮した交通不便地域に着目して—
・再開発事業のリスク評価と金融的手法の活用

【2021年9月修了】

・観光施策立案におけるソーシャルメディアデータの活用可能性
　大森銀山重要伝統的建造物群保存地区を対象として
・インターネットローカルメディアの継続的発展のための条件分析
　—茨城県小美玉市における市民メディア”TOWN JOURNAL OMITAMA ”運営実証実験を通じて—
・高齢化と外国人化が進む住宅団地における高齢者と外国人の相互関係の構築
　—一都三県築30年以上の都営県営・UR 賃貸住宅における自治会活動の分析を通じて—
・公共施設マネジメントにおける広域連携の可能性に関する研究
　—公立文化施設における再編の実態把握から—
・城下町都市の近代化過程における「外堀空間」の変容と市街地の形成に関する研究
　—水戸城下町を事例として—
・地方圏の市街化区域農地に対する価値認識の変化と生産緑地指定の拡がり
・戸建賃貸住宅の需給に関する分析
　—移住・住みかえ支援機構の取引データを用いて—
・水災害における復興まちづくりの現状と課題に関する研究
　—復興 計画策定自治体に着目して—
・個別建物更新を通じて形成された都市型住宅地の外部空間の分析と評価
　—千代田区番町地区を対象として—
・東京圏在来線の鉄道沿線まちづくりにおける官民連携に関する研究
　—自治体・鉄道会社間の包括連携協定に着目して—

まちづくり大学院に入学して——志望動機と入学後の感想

2021年度入学の第15期のみなさんに、志望の動機や今後の抱負などを思い思いに語っていただきました。

■伊藤有亮—不動産デベロッパー

学部時代の地域政策ゼミでの研究や、現在携わっている都市開発・エリアマネジメントに関する業務を通じ、「まちづくり」の領域の広さを実感、自身の領域をさらに広げ専門性を高めるため、まち大に入学しました。

各分野一流の先生方、多彩なバックグラウンドを持つ同期（パンフレットの円グラフ以上にでした）と双方向で行われる講義・演習では、毎回新しい気づきがあり、Zoomの退室ボタンを押すときは「まだまだ話し足りないぞ！」という気持ちになります。（対面の日はそのまま延長戦です）

社会人の立場でありながら正規の大学院生として深く学べることに感謝し、まち大生活を糧に、社会に貢献する研究やまちづくりに取り組んでいく意気込みです。

■A.I.—ソーシャルワーカー

"チャレンジして、人生を変えていけ" … 5年くらい前になるでしょうか。まち大の説明会で先生が仰った言葉がずっと耳に残っていました。私はソーシャルワーカーで、小学生2児の母です。長男が幼稚園に入園したのを機に勤めていた役所を辞めて、子供と一緒に過ごす日々でしたが、毎日の中で地域の子供の遊びの環境がどのように作られていくのか研究したいと思い、改めてまち大の門を叩きました。まちの姿は市民の目で見るもの、福祉職の目で見るもの、先生方、同級生達の教えて下さるもの、みな違って驚くばかりです。ぜひ自分の住む世界と出逢い直す契機に、様々なバックグラウンドの方にチャレンジしてみて欲しいなと感じています。

■井上謙三—コンサルティング業

人生100年時代。20歳前後迄の教育を基にその後50年以上前線に居続けるのは難しい。学び直しはいつでも出来る。それはまち大の顔ぶれを見れば一目瞭然。一流の講義はさることながら、特筆すべきはその学生の多様性。世代や経歴含めこれだけ多様な学生で構成されるプログラムはMBAですら見受けられない。リカレント教育の場としてだけ見てもこれほど有意義で先進的な場所を私は知らない。

まち大入学の契機は、私が「地方から日本を盛り上げる」ことを念頭に事業に取り組んでいる中で、そのための重要なピースが「まちの魅力」だと感じたから。かなりの門外漢ではあったが、多様な学生との議論や演習を通じて着実に自身の血肉となっている。

■岡　晴信—株式会社竹中工務店

まちづくりの業務を行っていますが、これまでの活動や業務を学術的に再整理するとともに、体系的にまちづくりについて学んだことを実践に活かすための入学しました。さまざまなバックボーンの同級生とプロフェッショナルな方の講師が多く刺激をもらっています。仕事とは異なる新しい知識が獲得でき、また新しい仲間が増えます。まちづくりの面白さを改めて感じますので、ぜひ一緒に学びましょう。

■岡村杏奈—凸版印刷株式会社

企業の採用プロモーション設計や探究型の教育コンテンツ造成に携わる中で、「教育と社会との繋がり」や「人の自発性を発揮する場」への関心が高まっていきました。そして、教育・社会・人を全て包括する「都市」のあり方について、多様な人々と対話を重ねながら、深く思考するために「まちづくり大学院」に入学しました。学校・会社・家庭などに求められるロールの中において自発性を充分に発揮することができない場合、「都市」の寛容性がそれを受けとめる場になりうるのではと考えています。そして、その可能性を模索するために、自らも「都市」の中で試行錯誤しています。

■神戸洋祐—地方公共団体

これまでインフラや東京オリンピック・パラリンピック競技大会のテクノロジー等に携わってきました。人口減少や更なる少子高齢化など経済構造が大きく変化する中、山積する行政課題の解決に向けて都市づくりの知見を深めたいと考え、東大まちづくり大学院を志望しました。

まち大は社会人大学院であることから長期履修制度を活用している人が多いです。また、教授陣の体系的な講義に加え、現場のプロジェクトに関する講義や多様な学生との演習で視野が広がり、有意義な時間を過ごしています。まち大で培う経験を幅広い行政分野に活かしていく所存であります。

■小松原早貴—日本政府観光局（JNTO）

訪日外国人誘致を仕事にしており、観光地の魅力をどう向上できるかと考える中でこれまで観光地がどう形成されてきたか、これから地域住民と観光客の調和のとれた持続可能な観光地づくりのために都市工学がどう貢献できるのか研究したいと思ったことがまち大を目指したきっかけでした。

入学してみて幅広いまちづくりの分野を著名な先生方から学ぶことができ毎日とても楽しく充実した時間を過ごしています。観光以外のまちづくりも興味深くまち大での学びを通じて視野が広がりました。挑戦して良かったと思いますし、まだまだ学びたいことがたくさんあるので今後のまち大生活を存分に楽しみたいと思います。

秋の陽射しに映える安田講堂

■斎藤　徹―街活性室株式会社

私は7年前に公共施設の運営を軸とした民間のまちづくり会社を創業しました。仕事を通じて様々な地域活性化事業を行ってきましたが、理論化できていないつけ刃的な事業も多く、まちづくりについて体系的に学びなおし、それを仕事に活かせたらと思い入学しました。まち大では都市工学に関する様々な知識を論理的に学ぶことができ、また年齢も職種も異なる多種多才な同期生と共にまちづくりを考えることができます。働きながら学ぶことは大変なことも多くありますが、それ以上に得られるものは大きいと思います。今後入学される方々にお会いできる日を楽しみにしております。

■清水健太郎―シグマクシス

事業開発とコンサルティングが生業。人口減少やデジタル化の中で直面したCovid-19。これは都市の役目や形態が大きく変わるぞ！　と感じ、堪らず入学。仕事も東急株式会社に出向し多摩田園都市のまちづくりを推進中。都市とはプラットフォームであり、メディアであり、エコシステムでもある。こんな視点に都市工学的素養が加われば、新しいことを描けそうだと妄想。そして入学後にこの仮説は正しかったと実感。学ぶテーマも教授陣も想像を絶するほど多岐多彩。加えて同期も輪をかけて多岐多彩。大正解でした！　かけがえのない人生の財産になりそうです。

■巣山　栞

まち大での学びは、沢山の刺激や新たな視点との出逢いに溢れています。講義をつうじて「まちづくり」に関わるさまざまな領域にふれるなかで、これまで自分のなかで断片的だった知識や関心事が少しずつつながり、それを理論としてだけでなく実践の形にしていくヒントを得られているように思います。また、なにより、豊かな知識と経験を培われてきた先生方からご指導や気づきを賜れること、さまざまな立場でまちづくりに携わってきた学生との対話と協働は、とてもかけがえのない経験として、自身の糧になっていることを実感できます。まち大での時間に感謝しつつ、まちと人のつながりや交流づくりによって都市の未来に貢献できるよう精進します。

■谷口充良

私は大学卒業後30数年間ずっと建築設計の仕事に従事しています。10年程前、公道に立つ街路灯のデザイン更新に携わったことがあり、周辺地域との合意形成を経験する中で、あらためてまちづくりへの関心が高まり、7年前に技術士（建設部門　都市計画専攻）を取得しました。その後、更なる高度なまちづくりの研究や経験を積みたく、この度まち大に入学致しました。同期のメンバーは、みなさんが優秀でユニークで、年齢差は少なからずありますが（私が同期の最高齢でしょう）、まさに「同級生」といった親しみと刺激を、日々感じております。今は、まちづくりという広範な中の、何処に特化して学び修論につなげるか、模索しております。

大イチョウ

■玉田　大―ゲーム業界

ゲームエンジンの特性と3D都市モデルを活用し、日常生活に近そうで遠いまちづくりと人々の関わり方を構築できないか、という動機で入学しました。が、今ではそれがどれだけ残っているか不明です。時間と空間に対する様々なスケールによる視座と、多様な専門分野が掛け合わされた都市学問に触れるうちに、まずは都市に対する慧眼のようなものを養うべきと思ったからです。現在は、学べば学ぶほど複雑性が増す都市という沼にハマりゆく日々を送っています。また、普段都市の仕事に関わりのない私の意見でもお付き合いいただける先生方、同期が充実しており、それがまち大の特徴だと思います。

■中尾洋子―航空関連会社

近年のインバウンド需要や東京オリンピックに向けて、利用増を見越し国内空港のターミナル再編や増改築に携わって来ましたが、地域や都市との繋がりに関しては積極的な関わりを持っておらず、今後持続的かつより良い発展をし続けるためには、もっと広い視野を持つべきではないか、との思いからまち大に入学しました。

二足のわらじに関しては不安も多くありましたが、同期の皆さんの熱い思いと姿勢に励まされ、刺激を受けながら充実した日々を過ごしています。限られた期間ではありますが、有意義で実りあるものに出来るよう、貪欲に学んでいきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

■藤元清暢―オリックス株式会社

幼少時南米ブラジルで暮らしていた際、街や学校の周りにスラム街がある環境だったことから途上国・新興国のインフラ整備についてずっと関心を持っていました。仕事も関連する業務としてこれまで15年程海外特にアジアにおけるインフラ・発電事業投資・開発等に携わっています。その中で先進国の技術・ノウハウを途上国の都市機能・インフラ整備に活かす可能性を説くまち大の「都市輸出」の本と出会い、これまで培ってきた自らの実務経験・見聞を改めて振り返ると共に、自らのまちづくりへの関わり方を探すべく入学を決めました。今は「まちづくり」という共通のテーマで集う仲間と知り合うことができることが何よりも一番の財産と感じています。

■村田　仁―日本電気株式会社

IT企業でデータ利活用型スマートシティの事業開発を担当しています。都市経営の高度化のためにと、自治体の都市整備部門職員にIoT＆ICTの必要性を説いても、なかなか理解してもらえません。DX時代のまちづくりで、互いが課題認識と意思疎通できるような共通プロトコルを作る必要があると思い、都市計画を学べる、まち大の門を叩きました。

業種も年齢も異なる同期生の皆さんの多種多様な知識と経験に触れ、各分野の先端を走る先生方の講義で様々な角度から「まちづくり」を学ぶことは、想像以上に刺激的でした。
日々新しい発見ばかりで、学ぶことの楽しさ、同志と出会えることの喜びを再発見させてもらっています。

■八幡忠良―デベロッパー

沿線開発の大義を持たない非鉄道系デベロッパーで働いていると, “まちづくり”というものをどれだけ真剣に考えられているだろうと自問したくなることがある。ビジネスである以上, 事業性ありきなのは否めない。“まち”全体よりも自社の“はこ”にフォーカスし, 近視眼的になりがちである。先生方はそんなことはよくご承知で, その足枷を解いてより大局的な“べき論”で物事を考えるよう唆してくださる。向学心溢れる同級生達は, 新たな知識や構想をもとに, 損得勘定抜きに議論を交わすことが三度の飯より好きな人々ばかりで刺激的だ。この知的で贅沢な場での学びを自身の血肉に変えるばかりでなく, 仕事その他を通じて少しでも社会に還元したい。

■柚木涼子―デジタル庁/情報処理推進機構(IPA)

大学院最初の半年を振り返ってみれば、学ぶ喜びや楽しさを感じ続けた日々であった。せっかく学生になったのだからと、長い社会人生活の中で身についてしまった効率的な「やり方」からは少し離れて、遠回りでも愚直に、好奇心の赴くままに、都市工学と向き合っている。

国や自治体のデジタル実装への関わりが深まるにつれ、デジタルの向こう側にいる人々とその暮らしやまちの存在が大きくなる。それを知らずにデジタル社会は実現できないとの思いで、まちづくり大学院の門を叩いた。これから、リアルなまちづくりとデジタルの関係性について何を見いだせるのか、楽しみながら学んでいきたいと思う。

■渡邉　充―京王電鉄株式会社

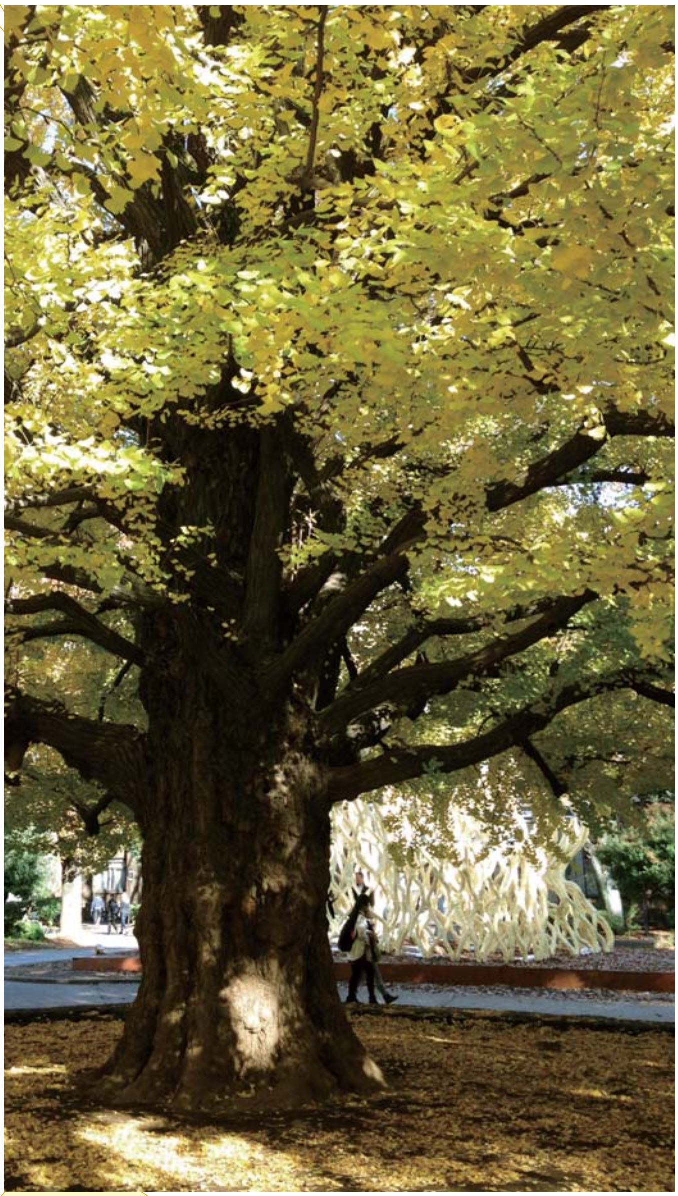
会社で「まちづくり」を推進する部署が新設され、長として配属されました。沿線の2つのまちに対して、まちの将来像を描き、必要な機能を検討し、その実現に向けて事業を推進することが求められ、「まちづくり」を体系的・網羅的に学びたいと感じて入学を志しました。

現在、著名な先生方から活きた事例を学ぶことができ、また、各方面で活躍している同級生からも刺激を受け、求めていた以上で非常に満足しています。

授業への出席、講義のレポート提出、グループに分かれてテーマに取組む「演習」は、想像以上に大変ですが、得るものが多いと感じています。幅広い世代の方とお酒を飲むのも楽しいです。入学をご検討の方の期待に応えてくれると思います。

レトロな趣きのある校舎内回廊

初夏のキャンパス



初秋のキャンパス

mps

■第15期生のプロフィール
人数：18名
年齢：26～56歳（平均41歳）
性別：男性12名、女性6名

まち大生のまちづくり

まち大では、既存の取り組みを批判的・客観的に捉える視点をもち、それを新たなまちづくりの展開に活かすための実践的な教育・研究を行っています。実際のまちづくりと連動した演習など、在学中の実践的な教育プログラムのほか、修了生もまち大在学中の経験と人的ネットワークを活かし、続々と新しい取り組みを行っています。ここでは、その一端をご紹介します。

コミュニティデザイン/ランドスケープデザイン演習「未来の砂町の風景を描く」

2021年度「まちづくり演習第2（S2ターム）」は「僕たちがみたい未来の東京」をテーマに、多様な問題を抱える江東区北砂地区を対象として、従来型の大規模再開発に対するオルタナティブ（当該地区の特徴をふまえて描かれる未来の風景）を提案することを課題とした。今回の課題は「企業による投資を想定する」ことを計画条件に据えた点に特徴があり、22名の学生が5班に分かれ、リサーチワーク・企業選定・コンセプトメイキングを中心とする前半のグループワーク課題、プランニング・デザインを中心する後半の個人課題に精力的に取り組んだ。原則的にオンライン形式の授業であったが、6月には感染症対策を講じた上でフィールドワーク（現地調査およびエスキス）も実施することができた。

2021年6月12日 現地調査の様子（屋外でエスキスを実施@北砂公園）

成果物として「未来の風景」を視覚的に示すという点については難易度がやや高かったという声も聞かれたものの、各自が北砂地区の将来空間像をビジュアライズすることができ、最終発表会では担当教員に加えゲストとして参加頂いたUR都市機構の方々（北砂地区における実際の事業担当者）を前に、魅力的なプレゼンテーションが展開された。

2021年8月7日 最終成果物および集合写真（一部）

担当教員：小泉秀樹、三谷徹、熊谷玄、矢吹剣一

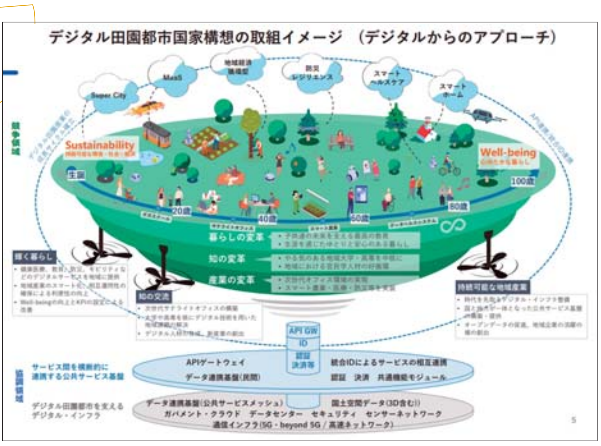
デジタルまちづくり

デジタル庁が出帆して半年。行政官400人超、民間人材150人超の混成チームで日々オールを漕いでいる。年間で国8,000億円、自治体5,000億円と言われるシステム予算を削減し、国民生活の利便性を上げ、well-being（心豊かな暮らし）の向上を実現することがミッションである。2025年まで国民への約束として細かくマイルストーンが引かれており、府省を越えて解を見出すことが必達とされている。

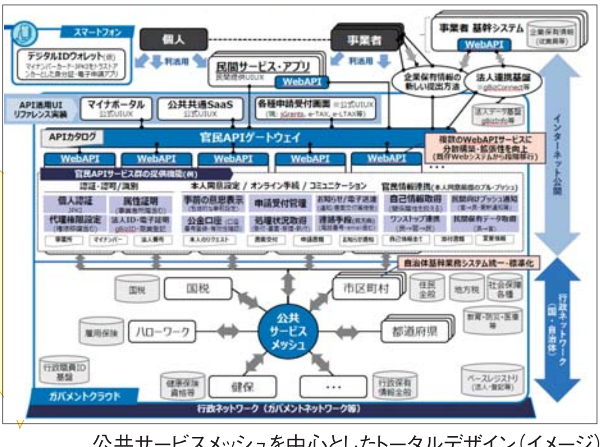
私の役割は大きく二つ。まず、システム全体のアーキテクチャの設計責任者として国と地方が連携するデジタル基盤を組み上げること。次にデジタル田園都市国家構想実現会議事務局として、デジタル田園都市を地方に産み出し、東京とは異なる都市・ふるさとの成長モデルを生み出すこと。デジタル田園都市国家構想と国と地方のデジタル基盤を構築するアーキテクチャ設計は、求肥とあんこの関係で、二つ揃って、美味しい謹製品となる(はず)。

振り返れば30年近く前に開発経済学を専攻し、開発途上国が経済的に豊かになることを希求して一次、二次産業を中心にフィールドワークをしながら策を巡らしていた。中国のシリコンバレーと後に称される北京・中関村でコンピュータのジャンク部品でいろいろ工作しているうちに、ソフトウェアとネットワークがあれば、開発途上国の成長モデルを劇的にシフトできると気づき、当時、デジタルの世界に踏み入れた。

時を経て、日本においても東京と地方の間に大きな溝が生じている。デジタルを鍵として、地方が飛躍できるのか。30年前の熱い想いを反芻しながら、まちづくり（仮想）に取り組んでいる。



デジタル田園都市国家構想の取組イメージ（デジタルからのアプローチ）



公共サービスメッシュを中心としたトータルデザイン（イメージ）

本丸達也（11期生/都市工学専攻博士課程2年（高見研究室）/デジタル庁
国・地方デジタル基盤統括 併 内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局/
愛媛県最高デジタル責任者補佐官）

4/26（月）イブニングセミナー「気候変動にどう立ち向かうか？ まちづくり分野の緩和策・適応策を考える」

2021年4月26日（月）、「気候変動にどう立ち向かうか？ まちづくり分野の緩和策・適応策を考える」と題したイブニングセミナーをオンラインで開催しました。地球規模の気候変動は、既に豪雨・豪雪、猛暑、高潮等を通じて都市や都市生活に直接的な影響を及ぼしており、それらへの適応が急務となっています。一方、気候変動の要因である二酸化炭素を代表とする温室効果ガスの増加を緩和するための「カーボンニュートラル」も社会的に求められるようになってきました。本セミナーでは、藤田壮教授、木内望客員教授、村山顕人准教授の3名が登壇し、まちづくり分野で取り組むべき気候変動の緩和策・適応策について議論を行いました。

東大まちづくり大学院・公開講義
シリーズ講義（全3回）をオンライン開催しました。

「都市地域政策の構想と展開」は、国の省庁や自治体のトップおよびその経験者が、都市・地域政策の着想や展開について語るシリーズ講義です。今年は、増田寛也客員教授による「コロナ禍からの地方創生」、小布施町の桜井昌季町長「小布施町のまちづくり～過去を活かし過去に縛られない暮らしづくり～」、渋谷区の長谷部健町長による「公共施設のリブランディング」の公開講座がオンラインで行われました。

東大まちづくり大学院・特別講義
「祝祭の中で都市は」をオンライン開催しました。

2022年1月6日、高見淳史准教授（都市工学専攻）の講義、「都市の交通政策Ⅰ・Ⅱ」の一環として、特別講義「祝祭の中で都市は。」を開催しました。当日は、新型コロナウイルスのオミクロン株の急速感染拡大に加え、東京は4年ぶりの大雪でしたが、オンライン参加者は、150人を超えました。

前半では、高山明氏（演出家・東京芸術大学教授）の著作『テアトロン』について、羽藤英二教授(社会基盤学専攻)による話題提供の下、高山明氏を中心に議論を行い、高山氏の行う都市を舞台としたツアー・パフォーマンス等の具体例を挙げつつ、都市に芸術をいかに埋め込むかについて議論を展開しました。

後半では、相馬千秋氏（キュレータ・東京芸術大学准教授）からご自身のコロナ禍での芸術活動について、五十嵐太郎氏（建築史家・東北大学教授）から2021年の建築について、それぞれご紹介いただいた後、「同時代性」をキーワードに議論が行われ、対面とオンラインを組み合わせた場づくりが、建築や芸術の新しい作り手を生むのではないか、地方だからこそ、芸術による新しい建築の流れが生まれ、それが東京に波及していくのではないかなど、活発な意見交換がなされました。

2022年のイブニングセミナー・特別セミナー（公開講義）について

2022年のイブニングセミナーとして「**健康な都市をデザインする**」を開催予定です。

日時：4/11（月）19:00～21:00　オンライン開催
登壇者：近藤克則教授（千葉大学）、谷口綾子教授（筑波大学）、花里真道准教授（千葉大学）
小泉秀樹教授（東京大学）、樋野公宏准教授（東京大学）

※お申し込み方法など、詳しくは決まり次第、まちづくり大学院ウェブサイトに公開いたします。

2022年度　東大まちづくり大学院入試情報

2022年度の入学試験を右記のように行います。募集要項の確認方法など詳しくは、東大まちづくり大学院のホームページをご覧ください。

募集要項・入学志望者案内Web公開日　4月上旬
説明会：4月　4日（月）19:00～
出願時期：5月16日（月）～20日（金）15:00
入学試験：筆記：6月18日（土）、口述：6月25日（土）
入学式：9月29日（木）

http://www.due.t.u-tokyo.ac.jp/mps/

■発行：東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　都市持続再生学コース・同寄付講座　〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1　TEL. 03-5841-8362
■office@mps.t.u-tokyo.ac.jp ■http://www.due.t.u-tokyo.ac.jp/mps/